

「凝固検査検体取り扱いに関するコンセンサス」を中心に
～よくあるお問合せ～

島田 愛

積水メディカル株式会社 カスタマーサポートセンター 学術企画グループ

【はじめに】

「検査の始まりは採血である」と言われるとおり、凝固検査において採血手技や採血管の取扱いが適切でないと正確な検査値を報告することはできません。凝固検査においては特に、適切な条件での採血・採血管の取扱い、遠心条件、保存条件などが重要といえます。本セミナーでは、2016年に日本検査血液学会標準化委員会凝固検査標準化ワーキンググループにより発表された「凝固検査用検体取扱いに関するコンセンサス」の内容と検査異常値の考え方のポイントについて解説いたします。

【本セミナーの内容】

1. 凝固検査用検体取扱いに関するコンセンサス（コンセンサス）

2016年に日本検査血液学会標準化委員会凝固検査標準化ワーキンググループは「コンセンサス」を発表しました。採血から測定に至るまでの一連の工程に対する標準的な操作手順が含まれ、7つのテーマ（①採血管、②採血、③全血保存、④遠心分離、⑤血漿保存、⑥凍結保存、⑦補足：ヘパリン混入疑いの対処例）について記載されています。「コンセンサス」を確認・把握することが、凝固検査における正確な検査値を報告する第一歩となります。

また、2021年に行われた「関西圏を中心とした施設における凝固検査検体取り扱いの現状の調査」によると、コンセンサス認知度や抗凝固剤、検体保存、採血に関する遵守状況は良好であったものの、遠心処理工程では遵守状況が悪かったという結果でした。

本日は改めてコンセンサスをよくある問合せを交えて概説いたします。

2. CP3000α™* のご紹介

弊社では、2025年5月に、血液凝固自動分析装置 CP3000αの販売を開始しました。血液凝固自動分析装置 CP3000の後継機として、400test/hのコンパクトモデルに使いやすさをプラスアルファした装置です。最後にCP3000α™の特長をご紹介します。

*販売名：血液凝固自動分析装置 CP3000α

製造販売届出番号：13B2X00163307001

一般名称：血液凝固分析装置

一般医療機器：特定保守管理医療機器

【おわりに】

検査業務において遭遇する可能性のある異常値は、病態を反映した異常値、治療を反映した異常値、分析系に由来する異常値、採血や採血管の取り扱いに由来する異常値が考えられます。日常検査においては、これらを素早く識別する対応が求められますので、これを念頭において情報提供いたします。